

な に わ の 隅 で 小休止



「健康寿命をのばす——たかつきモデル」をテーマに開かれたシンポジウム —高槻市の大阪医大で

いものもある。腸内の細菌叢のバランスが崩れると、健康に悪い影響が出た。ある菌を持って

合わせた大阪医大の事業が、文部科学省の「私立大学研究ブランディング事業」に選ばれた。選定を受け、大阪医大で1月22日、高槻市民や市役所、商工会議所関係者約350人を集めたキックオフシンポジウムが開かれた。大学の取り組みや、成果の還元について説明し、研究への市民の協力を呼び掛けることが狙いだ。シンポのテーマは「健康寿命をのばす——たかつきモデル」。口の中の唾液を採取して健康状態を分析したり、

唾液で健康診断も？



植野高章教授

「腸内フローラ」という言葉をご存じだろうか。最近、健康について語られる時に使われ、日本語にする「腸内細菌叢」。腸の中にはさまざまな細菌が生息している。「フローラ」は「花畑」とか「草むら」の意味で、腸の内壁に住む細菌の様子を、植物が群生している花畑や草むらにたとえて表現した。そして細菌には増えすぎると悪さをするものも、ヒトにとって好まし

口内フローラ研究進む

なもの。

「同様のことは、口の中についても言えます」

そう話すのは、大阪医大（高槻市）の植野高章教授（54）。「口腔外科学」だ。「口腔内にもたくさんの菌がすみついていますが、種類はざっと400種類とも言われます」

口の中の細菌叢は「腸内フローラ」と同様、「口腔内フローラ」とか「オーラルフローラ」と呼ばれる。植野教授らは、多くの人の唾液を採取して含まれる細菌を専用の分析機器でゲノム解析（全遺

情報解析）した。その結果、口の中の細菌叢はそれぞれ個人の特徴が

ると、ある種の心臓病や、がんになりやすいといった関係も浮かび上がってきたという。

歯周病が糖尿病や脳梗塞、心筋梗塞に関わっていることが知られてきた。歯周病の原因となった細菌が、別の病気にもかかわっているわけだ。適切な口腔ケアは、高齢者の誤嚥性肺炎を防ぎ、

全身の健康を良好に保つことにつながるという。大阪医大では、多くの市民の唾液を採取して、細菌叢の解析データを積み上げていく。

こうした口腔内細菌叢の研究や、食育に関するプロジェクトなどを組み

口腔ケアで市民の全身状態を良好に保ったりする「健康のまちづくり」の「たかつきモデル」を作り上げようというのだ。針を刺す必要がある採血と違って、唾液の採取は負担が小さい。植野教授によると、唾液の中の細菌叢の傾向は、歯磨き、うがいやガムをかんだ後など条件を変えても、あまり変化がないという。将来、唾液を採取することが健康診断の項目に入る時代がくるのかもしれない。採血がなくなることはないだろうが、注射針が苦手な人にとって検査を受けるハードルが下がるかもしれない。

【関野正】